

蜂須賀小六正勝

武将。中年を過ぎに、豊臣秀吉の配下になるや、文武両面からその出世を支え、徳島藩主の家祖になった。

はちすかころくまさかつ
以後管領不在1526 =

尾張国海東郡蜂須賀城で、同地を拠点とした国衆蜂須賀正利の長男に生まれる。幼名は小六。蜂須賀家は、足利義兼の子義房から出て、鎌倉幕府に、親家が蜂須賀郷に屋敷を賜ったことに始まり、尾張守護斯波家に仕え、祖父正成が知多郡の動乱に戦功があったという。蜂須賀は、もと高須賀といったらしく、須賀(スカ)は砂丘を表す語といい、これらの伝説を伝える蓮華寺と深い関係にあり、蜂須賀家の菩提寺になっている。

天王寺合戦・1531 = 5歳 : 生母(不明)が死去。

..... 1534 = 8歳 : この年、織田信長が誕生。
..... 1535 = **9歳** :
天文法華の乱1536 = 10歳 : この年、豊臣秀吉が誕生。

鉄砲伝来・・ 1543 = 17歳 :
..... 1544 = **18歳** :
ザビエル来日 1549 = 23歳 :

川中島の戦始1553 = **27歳** : 父の代より美濃齋藤氏に仕えていたようで、織田信秀方に付いた伯父正忠と対立するなか、**父が死去すると、出世すべく、郷里を出て、齋藤道三に近侍**、道三の書状に、蜂須賀氏が伊勢神宮の御師に匹敵する名族と書かれるほどで、**重用されるが**、道三がその子義龍に攻められた長良川の戦いでは、首級を上げるも、**道三が討死してしまったため、美濃におられなくなり、尾張国の岩倉城主で織田一族の信賢に仕えるが**、
..... 1556 = 30歳 : 岩倉城で反乱があった際、鎮圧に貢献し、賜衣を授けられるが、
..... 1557 = 31歳 : **信長と犬山城主で信長の従弟織田信清の連合に攻められて降伏したため、やむなく信清に仕えるも**、
大内府内開港1559 = 33歳 : **信清も信長と不和となって**、
桶狭間の戦・ 1560 = 34歳 :

大村長崎開港1562 = **36歳** :
川中島の戦終1564 = 38歳 : 信清が甲斐国へ亡命したため、蜂須賀郷に戻る。信長を敵としてきたため、出世は叶わなかったが、
..... 1566 = 40歳 : **美濃国での、秀吉による墨俣城の築城に、協力した土豪衆の1人として、弟又十郎と共に、大成果を挙げ、齋藤家の居城稲葉山城を攻める際には、大将となって夜襲、城主齋藤隆興を敗走させて、美濃平定に貢献、信長から、50余村と500貫を褒美として与えられたことで、道が一気に開かれ**、
織田信長入京1568 = 42歳 : **近江六角攻めで、秀吉と力として箕作城の攻撃に参加後、信長に従って上洛**、
京都宣教許可1569 = 43歳 : **秀吉の代官として京に留まって警備にあたり、公家らを安心せしめ、二条城が火災に見舞われた際には速やかに鎮火、足利義昭から、桐の紋の入った羽織を褒美として与えられ、家紋としての使用を許されるという異例の扱いを受け、信長からも、尾張春日井郡三淵郷に5,000石を褒賞を与えられた。**

石山合戦始・ 1570 = 44歳 : 越前征伐に、金ヶ崎の退き口では、自ら申し出て、殿に当たった秀吉軍の、その最後部を務め、姉川の戦いで活躍、近江横山城の攻略で、秀吉に従い功をあげ、秀吉に任せられた横山城の城代になる。
比叡山焼討・ 1571 = **45歳** : 堀秀村がいた箕浦城が浅井・一向一揆勢に攻められると、秀吉から救援に派遣され、一番槍の手柄を上げて、撃退。長島一向一揆との戦いにも従軍したが、この戦いでは弟正元を失う。

室町幕府滅亡1573 = 47歳 : 浅井氏の滅亡後、***近江長浜城主になった秀吉から、領内にも食邑が与えられ、老臣首班に遇せられ**、
長島一揆鎮圧1574 = 48歳 : **信長が、家中の殊勲・功臣を選抜した際、秀吉の配下では、伊藤左衛門尉と二人だけであった。**
安土城築城・ 1576 = 50歳 : 本願寺との天王寺合戦では、一番の槍の手柄を挙げただけでなく、中村重友と共に、一揆勢の首も多数上げて、秀吉より感状と100石の加増を与えられ、信長からも直接、定紋の軍衣を直に手渡される栄誉。

安土楽山楽座1577 = 51歳 : この年始まった**中国攻めには、秀吉の譜代衆になった息子家政と共に従軍し**、
安土教会許可1579 = 53歳 : 播磨三木城攻めでは、別所長治、小早川隆景の挟撃を受けた平田城で谷衛好が敗死すると、反撃に出た大村合戦で、小早川勢を撃退して200の首級を挙げて兵糧強奪も果たし、糧米輸送を阻止した。
石山合戦終・ 1580 = **54歳** : 家政とともに、広瀬城(長水城)を攻略して、城主宇野重清を討ち取る。***多くの功を挙げて、家政に月毛の名馬が与えられ、自らには、長水城が与えられて、初めて城主となった。その後、播磨を平定した秀吉が、黒田官兵衛(孝高)の助言で、姫路城を本拠とするのに合わせて、播磨窪野城5万3,000石を与えられるとともに、娘(宝珠院)が、黒田孝高の長男松千代丸(黒田長政)と婚約することになって、名実ともに、秀吉の左右の重臣の地位を固めることになった。**

ハリヤーノ謁見 1581 = 55歳 : 因幡鳥取城攻めにも従軍し、秀吉の命で、加藤清正と強襲するも撃退されたが、吉川経家の籠城中に、吉岡城、大崎城、鹿野城の降誘を連言してこれを降す。信長の許可を得て、秀吉が行った淡路遠征で、淡路勢が降伏し諸城が開城した際、名代として岩屋城を引き取るが、この城は池田領となる。

本能寺の変・ 1582 = 56歳 : **秀吉に進言して、備中高松城を水攻め、窮した毛利勢から、清水宗治らの切腹と開城で和睦を求められるが、すでに、本能寺の変による信長の死を知った秀吉からの厳命で、次々知らせに来る使者らを監禁・追い返すなどして機密保持を徹底しながら、孝高とともに、安国寺惠瓊と協議して、和睦を成立させる。**"中国大返し"を始めて、姫路城に帰還した秀吉からの命で、城内すべての金銀米穀を家臣に円滑に分配し、山崎の合戦では、戦功を上げる。その後も、孝高と共に、毛利氏との困難な関係の再構築に取り組む間、清洲会議が開かれ、その結果に不満な織田家宿老・柴田勝家との戦いが勃発すると、

賤ヶ岳の戦・ 1583 = 57歳 : **戦いの当日は、秀吉本陣に控え、勝利に貢献するばかりでなく、勝家側にあつて、秀吉がその勇武を愛した佐久間盛政に、降伏を勧める役を担い、心を尽くして説得するも、盛政は自刃すら受け入れず、斬られることを望むほど、強剛であったことに敬服もしている。**その後、長島城で籠城を続けていた滝川一益のもとに派遣され、名代として彼の投降を受け入れて、滝川領の織田信雄への受け渡しを統括するなど、武将である以上に、秀吉配下において、文治の才が最も卓越していたのである。この頃には、すでに家督を譲っていて、蜂須賀家当主としては隠退し、所領の窪野の経営は家政が取り仕切るようになっている。秀吉が本拠を大阪に定めて、大坂城の築城を始めると、その普請にも加わって、

長久手の戦・ 1584 = 58歳 : 前年より病だった杉原家次が死去して、***ついに、家中の筆頭格の老臣となり、大坂城のすぐ側の楼岸に、新しい邸宅を与えられ、側近として毎日登城、参勤料として丹波・河内の内に5千石の領地をあてがわれた。**徳川家康・織田信雄との小牧・長久手の戦いの際には、家政と共に、坂城留守居となり、戦後、長島城から桑名城に移った信雄を圧迫し、講和を受け入れるように、派遣される。3年がかりで、三度中国に下向して、ようやく毛利氏との境を確定し、あわせて、相国寺光源院領も回復させる。

豊臣秀吉関白1585 = 59歳 : 秀吉が内大臣宣下を受けたのを機に、朝廷より四位下内位を賜り、修理大夫に叙任された。紀州征伐では、子家政が大きな手柄を立てるなか、太田城主太田左近からの、首謀者36人の命を引き替える一揆勢と婦女子の助命を嘆願を、秀吉に許され、自害した者達を葬り、首塚で弔ったという。**四国征伐にあたり、秀吉から、阿波一国を与えよとの内意を示されるが、すでに齢六十にして隠居の身であり、大坂にあつて秀吉の側近として仕えることを望んでこれを辞退し、代わりに所領は子の家政に与えられることを希望、論功行賞によって、阿波一国(17万3千石)は家政に与えられ、窪野城は福島正則へ与えられる。**蜂須賀氏の郎党家臣をつれて阿波に入国した家政が、秀吉の指示で、瀧山城を破却して、徳島城を築城するのを見届けて、

秀吉太政大臣1586 = 60歳 : 病に臥せるようになり、京都で養生、一旦、快復して大坂に帰るが、ほどなく、楼岸の邸宅で**没した。**秀吉が内大臣宣下されるとともに、桐の紋を用いることになったため、これを憚って、蜂須賀家では柏紋に改めている。講談などで、蜂須賀小六は墨俣一夜城のために集められた夜討強盗の野武士集団の親分であったとされているが、小瀬甫庵の「太閤記」が秀吉の生い立ちを面白くするために作った話で、蜂須賀家の子孫は長くその負のイメージに苦しんできた。